

# 「子どもが自らを守る力」と 「地域の見守る力」を高める取り組み

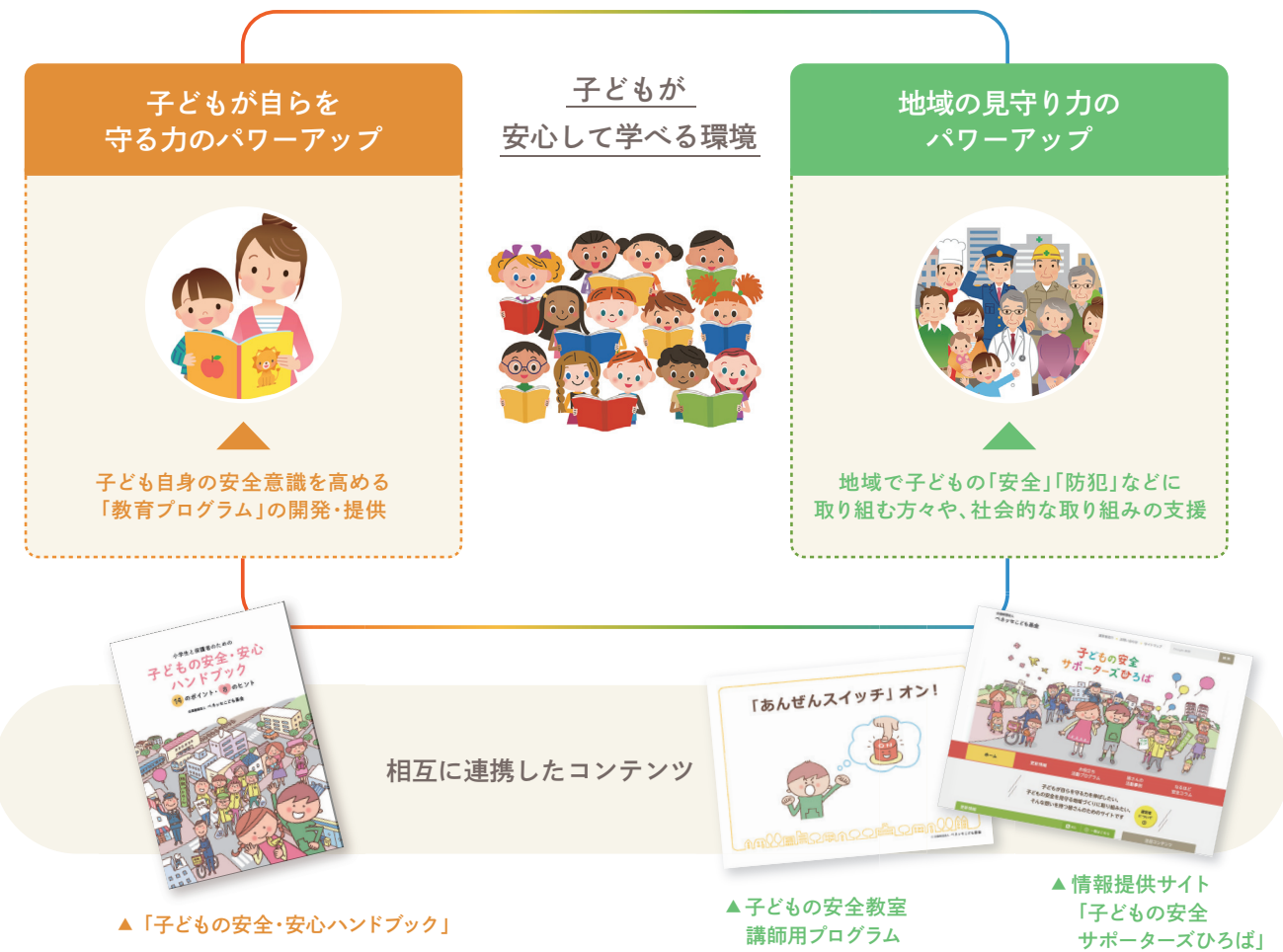
「安全教室」や「防犯ボランティア」「こども110番」など、安全・防犯の取り組みに対する社会的な関心が高まり、地域でさまざまな取り組みが行われています。  
 未来ある子どもたちが、安心して学習に取り組み、自らの可能性を広げられる環境の実現には、子ども自身が自分を守るための力を育むとともに、子どもを見守りながら育てられる地域の環境づくりが必要と考え、それらを活動の2本の柱とし、専門家のご協力をいただきながら、取り組みを進めています。

## ○ 親子支援の取り組みから、地域のサポートへ

安全教育冊子「子どもの安全・安心ハンドブック」発行から始まったこの活動は、当財団が最初に着手した重要な取り組みのひとつです。

当財団では、全国で「子どもの安全・安心ハンドブック」を活用いただく過程で、PTA や防犯ボランティアをはじめとする、地域で子どもの安全・安心な環境づくりに取り組むさまざまな皆様と対話を重ねました。そして、子どもが安心して学びに集中できる環境の実現には、子どもが自らを守る力を伸ばすだけでなく、地域の見守り力アップをサポートするという両輪の推進が重要と考えました。このような考えのもと、2015年度は新たな取り組みとして講師用プログラムの開発や、地域の活動事例やノウハウの共有ができる情報基盤としてのサイト構築に取り組みました。

### ベネッセこども基金の「安心・安全を守る活動」全体像



## 「子どもの安全・安心ハンドブック」

～自分を守るために身につけたい知識や行動について、子どもの目線でわかりやすく説明する冊子～



2015年3月発行。学校・PTA行事、自治体等での子ども向けの配布、防犯ボランティア研修で子ども向けの説明を学ぶための資料などの形で、多数の活用をいただいています。

- ◆ 主に小学生（特に低学年～中学年）を想定
- ◆ 専門家に監修をいただいた、子どもが実践しやすい内容を紹介
- ◆ 絵本のような親しみやすいトーンで「怖くなく」子どもに必要な知識が伝わる

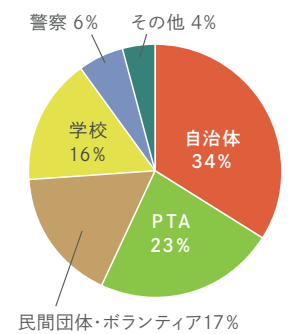
<活用シーン>

- ・ご家庭で保護者の方とお子様と一緒に読んでいただく
  - ・学校や地域行事で研修会やワークショップを行う際の資料として配布
- >> 冊子紹介ページ: <http://blog.benesse.ne.jp/anzen/programs/post.html>

### ご活用いただいた皆様の声

- 😊 親しみやすいイラストで子どもに受け入れられやすく、「防犯」「安全」だが、必要以上に怖い印象を与えないのがよいです。(PTA役員)
- 😊 安全教室開催後、家でも親子で考えるきっかけがある、と思っていました。自分たちの教室と連携して活用したいです。(自治体安全まちづくりご担当)
- 😊 登場者が子どもと、子どもを取り巻く街の人全般であるため、防犯ボランティアや学校主体の企画でも活用しやすく感じました。(防犯協会ご担当)
- 😊 子どもが学校から持って帰ってきました。家庭の中でも活用しやすいです。(小学生保護者)

### 冊子のご提供先内訳 (2015年度)



## 子どもの安全教室講師用プログラム

～地域で子どもの「安全」「防犯」などに取り組む方々の活動を支援するプログラム第1弾～



▲ テスト開催を行い、プログラムをブラッシュアップ中

地域の子どもの安全教室などでの活用を想定した講師用プログラムは、「子どもの安全・安心ハンドブック」を活用し、独自に子ども向けの講演をされた保護者の方々の事例を参考にする中で、こうした皆様の取り組みをサポートしたいという思いから、新たに開発したものです。



- ◆ オリジナルスライドデータとシナリオ骨子のパッケージで、取り組みやすい
- ◆ 「子どもの安全・安心ハンドブック」と連携した内容
- ◆ 親しみやすいトーンで「怖くなく」子どもに必要な知識が伝わる

「子どもの安全・安心ハンドブック」「子どもの安全教室講師用プログラム」は、子どもの安全を守るためのイベントやワークショップ（自治体や学校など公的団体によるもの、あるいはボランティアなどによる非営利を目的とした開催）で活用される場合に限り、無償で提供します。

活用希望の方は、以下までご連絡ください。

< 公益財団法人ベネッセこども基金 安心・安全窓口 > TEL: 04-7137-2570 / 祝日を除く月～金 (10:00～17:00)



## ◎ 地域の方々をつなぎサポートする情報サイト「子どもの安全サポーターズひろば」の構築

子どもの安全を守りたいと考える方々が集い、学びあい、元気になる場となることを目指しています。

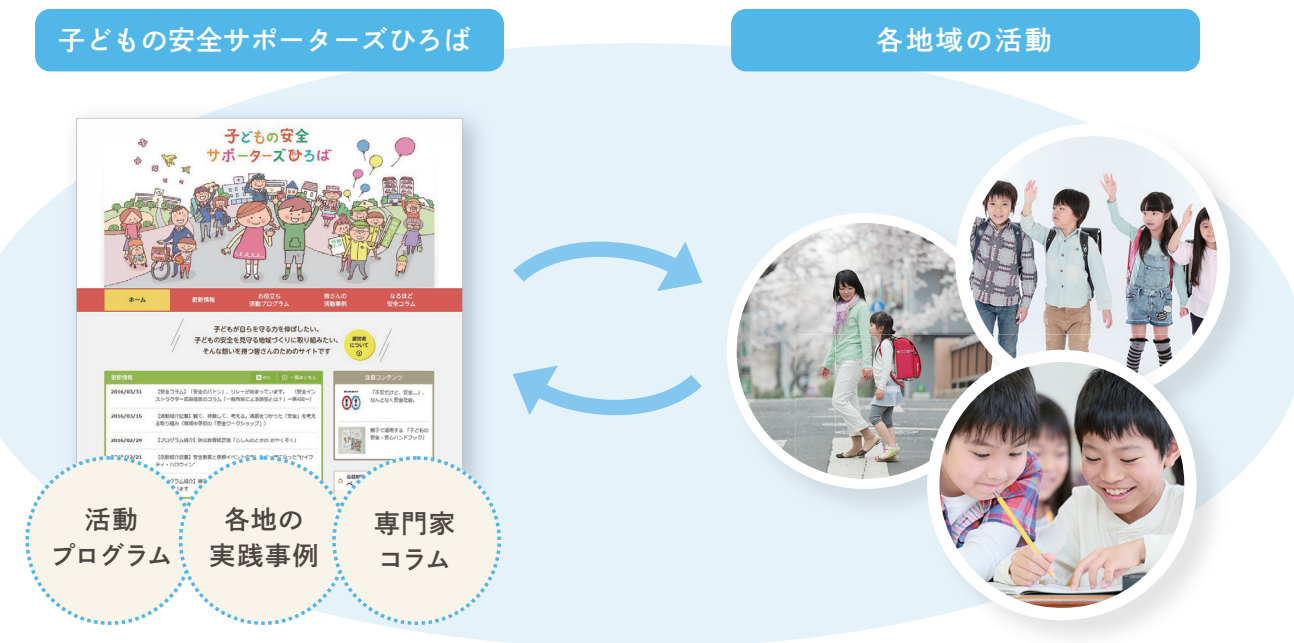
地域で子どもの安心・安全な環境づくりに取り組む方々をつなぎ、さらに元気に活動を進めていただくことを目的として、情報提供サイト

「子どもの安全サポーターズひろば」を2015年度にスタートしました。

当財団が企画開発したプログラムの共有や各地域での活動事例の紹介、専門家の方々の知見の提供などを行っています。

>>子どもの安全サポーターズひろば: <http://benesse-kodomokikin.or.jp/activity/anzen/index.html>

### < 子どもを守る知見の提供と交流の場を生み出すサイトづくり >



## 防災教育紙芝居「じしんのときのおやくそく」を全国の保育園・幼稚園にお届け

東日本大震災から5年の節目に、防災教育紙芝居「じしんのときのおやくそく」を企画制作し、全国6,000以上の保育園・幼稚園にお届けしました。

就学前の子どもが、地震が起きたときに自分自身を守る行動がとれるように学んでほしいという思いのもと、普及を進めています。

### ◎ 子どもの防災に対する関心の高さを実感すると共に、全国の園での防災教育実践に貢献

全国の幼稚園・保育園などから、6,000件以上（2015年度末時点）のご要望をいただきました。全国の2割近くの園で、子どもたちの防災教育の教材として、ご活用いただいていることとなります。また、今回の取り組みは、新聞にも複数取り上げられ、教育委員会や消防関係者、防災士の方などからのお問い合わせもいただきました。幼児向けの防災教育に対する社会的なニーズの高さを実感しています。



▲ えきまえこども園「凜」(長崎市)でのご活用ようす

#### ご活用いただいた皆様の声

- 😊 早速、この紙芝居を使って、避難訓練をしました。
- 😊 繰り返し練習して、もしもの時に園児が自分自身をまもることができる力を身につけられるようにしたいです。
- 😊 日々の避難訓練と併せて、子どもたちの安全を守るための取り組みに、より一層励みます。
- 😊 周囲の防災関係者に紹介しようと思います。
- 😊 消防士の幼児向け防災指導に活用します。

### ◎ 防災の専門家の方々の知見とベネッセの教材制作のノウハウが詰まった防災教育紙芝居



防災教育紙芝居「じしんのときのおやくそく」は、(株)ベネッセコーポレーション(こどもちゃれんじ)が東日本大震災の復興支援チャリティーとして制作した同名の絵本をベースに生まれました。防災の専門家の方々の知見と(こどもちゃれんじ)の教材制作のノウハウが活かされたものです。

当時の制作関係者の皆さまに今回の活動趣旨にご賛同・ご協力いただき、絵本から紙芝居へのリニューアルが実現したことで、子どもにとって親しみやすく、理解しやすい防災教育教材を早期に具現化し、提供することができました。

※防災教育紙芝居「じしんのときのおやくそく」は、当財団が(こどもちゃれんじ)から絵本のお話を無償で譲り受け、キャラクターの使用許可を得て、紙芝居として再構成したものです。

#### 『あおにんじゃ』が子どもたちの合言葉になることを願って

絵本を制作した当時は、「ようやく被災地のためにできることが見つかった」ととても嬉しく思ったことを覚えています。地震がテーマなので、子どもたちに恐怖心を与えないよう、幼稚園で教えていた経験を生かして、工夫しながらお話をつくっていききました。その上でこどもちゃれんじのキャラクター・しまじろうはとても重要な役割を担っています。子どもたちにとって等身大の存在であるしまじろうがいることで、子どもたちは安心して、しまじろうと一緒に地震を疑似体験し『あおにんじゃ』(キーワード化した地震時の行動)を練習できるのです。

当初から「いつか紙芝居になって全国の園で読まれるようになってほしい」と思っていたので、念願だった夢が叶ったような気持ちです。この防災教育紙芝居が幼稚園・保育園で読み続けられて、いつか「じしんのときは『あおにんじゃ』。おむかえくるまでまってね」というフレーズが、日本中の子どもたちの「合言葉」となることを願っています。

※わたなべももさんは「じしんのときのおやくそく」のお話の執筆者で、紙芝居制作にも全面的にご協力いただきました。



作家(作詞・おはなし) わたなべももさん

#### 「子どもの安全をみんなで考える」ためのきっかけづくりを

子どもたちの安全は、社会全体の願いです。とくに犯罪被害を防ぐため、地域での見守りや、安全教室の実施などさまざまな取り組みが広がりをみせています。一方、アンケートや調査から垣間見えるのは、「犯罪への不安はあるけど、日ごろの生活で危険は感じないので防犯対策はしていない…」という安全と安心のギャップともいえる状況です。そもそも防犯は、「不審者」や「悪人」などのイメージが先行し、コワイ、カタい、つまらない…と思われがちな分野でもあります。しかし、いつ遭遇するか分からない危険から身を守るためには、安全への意識を忘れないことが不可欠です。そのために、より身近に感じられて分かりやすい発信の方法のひとつとして「子どもの安全・安心ハンドブック」が誕生しました。子どもたち自身が「自分を守る力」を引き出す視点でまとめた一冊です。監修者として企画段階から参画し、もっとポジティブに元気に安全への自信を持っていただきたいとの願いを込めています。ところで、子どもたちへ安全を伝える機会は、一過性のイベントではなく、定期的に繰り返し行われることが重要です。そのためには、保護者やPTA、学校、地域のみならず子どもたちの身近にいる大人たち

うさぎママのパトロール教室主宰  
安全インストラクター  
武田 信彦 さん



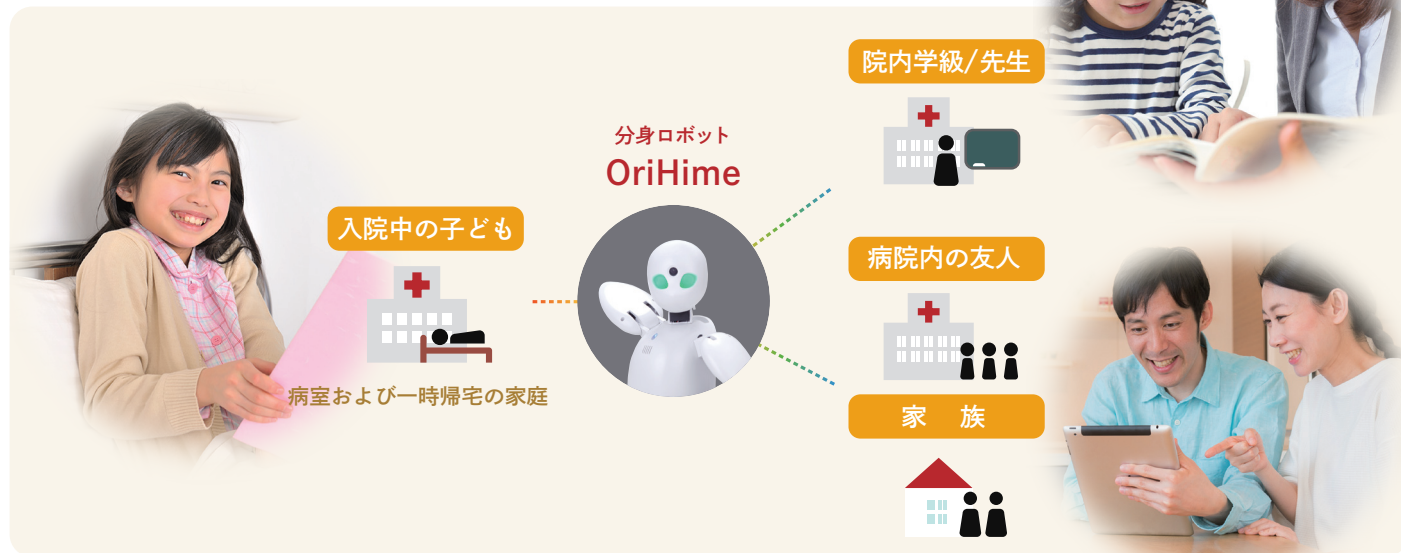
自らが伝えていただくことが効果的だと考えています。ベネッセこども基金との協働における、次のチャレンジとしては、誰もがすぐ実践できる安全教室パッケージの普及です。楽しい雰囲気の中で、子どもたち自身も「自分を守る力」を確認することができるものです。安全は、「自分で自分を守る」ばかりではなく、地域とのゆるやかなつながり、世代を超えたコミュニケーションなどを育むことも大切な要素です。ひきつづき、「子どもの安全をみんなで考える」ためのきっかけづくりを提案していきます。

※ 武田信彦さんは、犯罪防止NPOの幹部などを経て、2006年より安全インストラクターとして活動を開始し、「一般市民としてできる安全のコツ」をテーマに全国で講演やセミナーなどを多数実施されています。子どもたちの安全力向上を目的とした「安全ワークショップ」も好評を得ています。

サイト：うさぎママのパトロール教室  
<http://www.usagimama.com/>



# ICT を使った 院内学級での学習支援



重い病気などにより、学びへの意欲向上や学習に対する支援を必要としている子どもたちがたくさんいます。特に、長期入院や療養を必要としている場合、今まで通り学校に通うことが難しくなるため、子どもは休学や転籍による学習の遅れや、復学への不安を抱えやすく、支援も行き届きにくい現状があります。病気によって学びに対してさまざまな不安や課題を抱える子どもたちのために、ロボットなどのICTを使った院内学級における学び支援に取り組んでいます。

## ○ 成育医療研究センター内「そよ風分教室」でのプロジェクトスタート

重い病気で長期入院や療養している子どもたちのために、小児がんの拠点病院でもある国立成育医療研究センターと連携して、院内学級での学習・コミュニケーションをサポートするプロジェクトをスタートしています。

本プロジェクトでは、株式会社オリィ研究所の“OriHime”というロボットを使い、入院中で病室から出られない子どもと、院内学級の先生や友人などをつなぎ、学びやコミュニケーションの場・機会を提供する活動に取り組んでいます。まずは、成育医療研究センター内にある、東京都立光明特別支援学校のそよ風分教室にOriHimeを貸し出し、子どもたちや先生に活用していただいています。



▲ そよ風分教室での授業のようす

### OriHimeが子どもたちを笑顔に

小学2年生の授業で入院中の子どものベッドサイドとそよ風分教室をOriHimeでつなぎました。入院して以来、分教室に行くことができず、ずっと友達とふれあう機会がなかったので、最初は緊張していたようでしたが、OriHimeを通して分教室の同級生の顔を見て、とてもうれしそうな表情を見せていました。分教室にいる子ども達もOriHimeの動きやリアクションを見て、病室にいる友達とのやり取りを楽しみました。

## ○ 分身ロボット“OriHime”とは

分身ロボット“OriHime”は、カメラ・マイク・スピーカーが搭載された遠隔操作ロボットです。病気を抱えていたり、家族と離れ離れに暮らしていたりなど、さまざまな理由により行きたいところへ行けない人の分身となって、友人や家族とのコミュニケーションを可能とします。

OriHimeはインターネットを通じて遠隔操作ができ、タブレットを操作して辺りを見回したり、ジェスチャーをしたり、OriHimeの周囲の人と会話を楽しんだりすることができます。操作している人も、接続先にいる人にとっても、分身であるOriHimeという存在を通じて、「あたかもその人がそこにいる」ような「存在感」を感じながらコミュニケーションが取れることが特徴です。

**カメラ**  
額に搭載された高画質カメラで、操作している人に目の前の景色を伝えます。首を動かすことで自由に周辺の様子が見えます。

**マイク・スピーカー**  
操作している人は、マイクとスピーカーを通して、OriHimeの向こう側にいる人々と自由に会話を楽しめます。

**多彩な表現**  
拍手をしたり、「うん」とうなずいたり。腕や顔を動かしながら、操作している人の感情を豊かに表現します。

**操作は簡単**  
画面をスワイプして顔の向きを変えたり、アイコンを押して動作を変えたりできます。

### 入院している子どもたちに よりよい学びや 体験を届けたい

東京都立光明特別支援学校 副校長  
永島 崇子さん



そよ風分教室には、成育医療研究センターに入院している、小学生から高校生までの子どもたちが通っています。子どもたちは、医師の判断のもと、病室から教室へ登校したり、また教師が病室のベッドサイドへ出向いたりして、授業を受けていますが、治療の状況や体調によって授業や学校行事に参加できないこともあります。子どもには、伸びようとする力、仲間を大切に思い、また勉強したいという気持ちがあり、それは病気を抱える子どもたちも同じです。入院しなければならない子どもたちにとって、落ち着いて治療に専念することが必要ですが、途切れずに学びの機会を得られることも、とても大切になります。院内の子どもたちにできる限りよい体験をしてもらいたいと考え、今回のOriHimeを使ったプロジェクトは、その実現のサポートとなるものだと思います。よい事例を作り、病気を抱える子どもたちの学びにつながる活動が広がっていくことを願っています。

### 入院していても、家族や友人と 同じ時間を過ごせる 未来を目指して

株式会社オリィ研究所 代表取締役 CEO  
吉藤 健太郎さん



病気で入院している子どもたちの中には、少なからず「孤独」を感じている子がいます。私自身、小学校から中学にかけて3年半の間、自宅療養やストレスでほとんど学校に通う事ができず、勉強の遅れや友人との会話についていけないことに不安や孤独を感じていた時期がありました。その経験から、「親しい人と同士がつながり、孤独でなくなる未来」を創りたいと思うようになり、行きたいところに行け、会いたい人に会える、人と人をつなぐ方法として、OriHimeを開発しました。院内学級に通う子どもたちが、OriHimeを使って授業を受けたり、ご家族やクラスメイトとの交流を楽しんだりできるよう、これからも「存在感の伝達」をコアに、より生徒さんに喜んでもらえるプロダクトづくりをしていきたいと思っています。



# 親子で国際的な視野を広げる 「ちびっこおえかきコンテスト」



地球には文化・民族・宗教などさまざまな面で異なるバックグラウンドをもつ人々が暮らしており、グローバル化が加速している現代においては国籍や人種を超えてお互いを理解し、共存していくことが不可欠です。特に未来の担い手である子どもたちは、広い視野を持ち、新しい知見と価値観を持つグローバルな人材に成長することが求められており、そのためには幼い時期から広く「世界」にふれる機会があることが大切です。幼少期の子どもに「世界」にふれる機会を提供することを目指して、認定NPO法人グッドネーバース・ジャパンとの共催で、「ちびっこおえかきコンテスト」を開催しています。

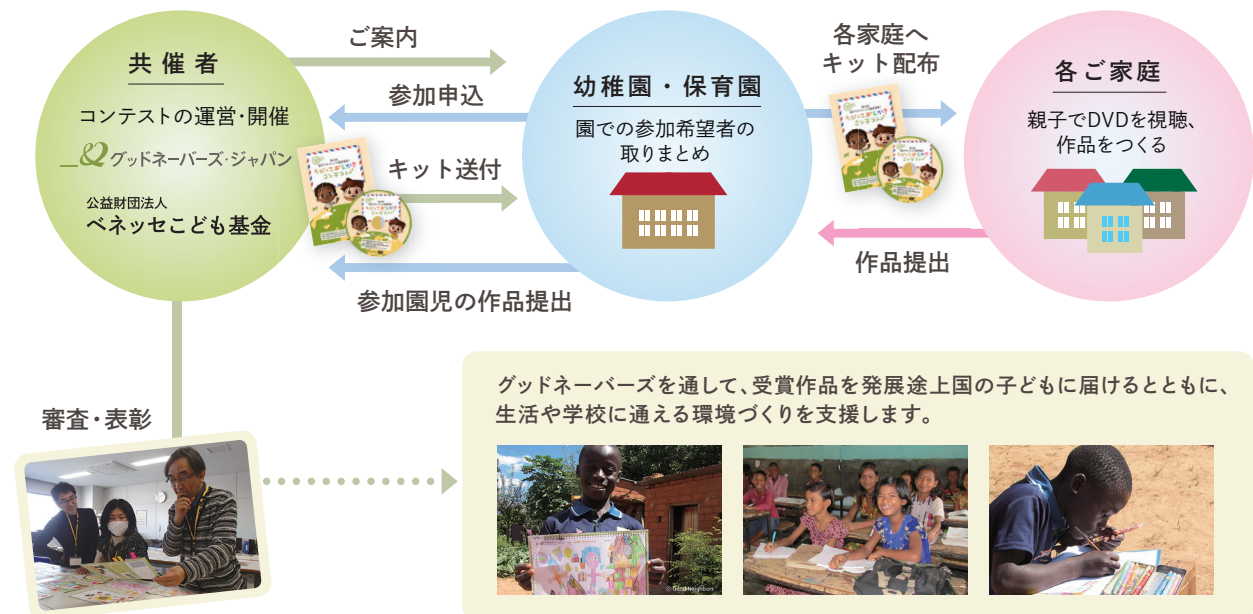
## ちびっこおえかきコンテストとは

「親子でチャレンジ国際理解!ちびっこおえかきコンテスト」は、就学前の子どもとその保護者を対象とした教育プログラムです。本コンテストでは、映像教材を見て感じたことを、子どもが家庭で保護者と対話したり、絵で表現したりすることを通して、発展途上国の問題やそこに暮らす子どもたちについて知ることができます。子どもは、保護者との対話やお絵描きにより理解を深めることができ、また保護者も子どもと一緒に取り組むことで、世界への関心を高めるような学びの機会を得ることができます。

### 3つの特徴

- ① 子どもの発達に合った教材で学べる
- ② 親子で一緒にチャレンジできる
- ③ 国際的な視野が広がる

### コンテストの流れ



## 全国から1,715組の子どもと保護者が一緒に取り組みました



1,715点もの作品が寄せられ、全国から83の幼稚園・保育園の参加がありました。厳正な審査のうえ、最優秀賞1作品、優秀賞3作品、審査員賞3作品、企業賞2作品、グッドネーバース・ジャパン/ベネッセこども基金賞2作品、団体賞1園、佳作40作品が選出されました。どの作品も、発展途上国に暮らす子どもの夢を応援する絵を、クレヨンや絵の具・折り紙などの子どもの好きな画材で自由に表現しています。親子で一緒に取り組んでいただけるよう、保護者の方にもコメントを書いていただく欄を設けているのもこのコンテストの特長です。

### ▲第三回 最優秀賞作品

### 審査員コメント /

普段使わない色を使っているところに子どもの想像力の豊かさを感じます。マストウ君に届けたいものがたくさん散りばめられていて、たいしくんの想いがこもっています。

### 保護者の方からのメッセージ /

DVDを見終わってからの数時間、普段見たことがない程の集中力で、絵を描き続けました。最初は募金をしようと思ってお金をかきましたが、買えるものが無いと困ると思い、マストウが喜ぶと思うものを沢山考え、サッカーボールやハンバーガー、ジュース等を描きました。自分とは全く違う環境に住む、年齢の近い男の子の気持ちを想像することは、彼にとってとても良い経験だと思います。一生懸命描いたこの気持ちが、マストウにも届きますように!

## 表彰式の様子

2016年2月27日(土)

(株)ベネッセコーポレーション多摩オフィスにて



一人ひとり壇上へ上がってもらい表彰状を受け取りました

会場内に展示された入賞作品を皆さんじっくりご覧になっていました



▲1,715人の中から受賞した園児36名とご家族や園の先生方約160名が参加

たくさんの元気な子どもたちにご参加いただき、賑やかでほのぼのとした式典になりました

### ご参加いただいた保護者の声

世界には、貧しい環境にある人がいるということが教えられたのがよかった。上の子(小1)も世界の国々に興味をもち始め、読む本も世界の習慣や国々のことなど視野が広がってきました。

紙とえんぴつを前に、好きなだけ描けることに、「これも当たり前ではないんだよね」と言っていました。

食事に苦手なものがあっても「マストウ君はごはんたくさん食べられないから、食べる!」と食べるようになったり、新しくマストウ君の絵を描いて幼稚園に持っていったりしています。

### 親子での対話と、子どもの自由な発想を重んじるコンテスト

「ちびっこおえかきコンテスト」審査員

クリエイティブディレクター 藤崎実さん



「ちびっこおえかきコンテスト」には大きく3つの意義があると思っています。1つ目は、取り組みの中で親子や家庭での対話が生み出されること。2つ目は、世界について知るきっかけが得られるということ。そして3つ目は、絵を描くことをコミュニケーションの手段として、子どもの自由で多様な発想を大切にすることです。三回目の開催となった今年も、たくさんの絵が集まりました。毎回審査で思うことは、例えば300枚の絵が集まれば、そこには300人の子どもの気持ちがあるということです。マストウ君の暮らしを見て何を感じ、何を絵にしたいと思ったのか。子ども一人ひとりの受け止め方が違うからこそ、描かれる絵も全部違うというわけです。本コンテストで大切なのは、絵の上手下手ではないということです。子どもの気持ちやどこまで素直に絵になっているのかです。子どもには大人にない感性があり、そのオリジナリティこそ才能です。今年も審査の過程でたくさんの素晴らしい絵に出会えました。